

国際社会学部—フランス（西南ヨーロッパ）

I.ヨーロッパの西側の「六角形」の形をした地域、それがフランスのメトロポリテーヌ（本土）

その形状から「六角形『Hexagone』」としばしば呼称されるフランス（本土）は、ヨーロッパの西側に位置しています。ベルギー、リュクセンブルグ、ドイツ、スイス、イタリア、モナコ、アンドラ、スペインと国境を接し、また大西洋、北海、英仏海峡、地中海を海上国境とする国です。世界各地に点在する海外県また海外領土を合わせると国土は、63万2,834平方キロメートルと、ヨーロッパ連合（EU）のなかでは最も広大です。首都はパリ、フランス語を公用語とし、直接普通選挙で選ばれる大統領を国家元首とする共和国です。

現在のフランスは、第五共和政です。フランス革命期の1792年9月22日に国民公会で「共和国元年」が宣言されて以来、5番目の共和政体となります。フランスが、「自由、平等、博愛」という標語を掲げ、「ラ・マルセイーズ」を国歌としていることが如実に物語るように、フランス革命は、共和国の歴史的な起源として記憶されまた記念される重要な出来事となっています。

フランスは、イル＝ド＝フランス地域圏、オー＝ド＝フランス地域圏、ブルターニュ地域圏、オクシタニー地域圏、ノルマンディー地域圏といった合計18の地域圏から構成されています。それらの行政単位は、歴史的には、独自の文化、法制度や慣習、地方言語をもつ多かれ少なかれオートノミーをもっていた諸地方に相当します。

ナショナルなアイデンティティとローカルなアイデンティティ、そしてまたヨーロッパというトランス・ナショナルなアイデンティティが重なり合いながら、そして亀裂や葛藤を含みながら、「フランス」を作り上げているといえます。

本学では、フランスの言語と文化、歴史と社会について学ぶことができます。

現代社会は、さまざまな問題に直面しています。気候変動、エネルギー問題、社会的格差、人口の高齢化、地球規模で加速される人口移動と移民、排外主義の高まり、歴史問題の解決といった一連の課題は、日本もフランスも避けて通ることはできません。フランスでは、どのような取り組みがなされているのでしょうか？どのような選択がどのようなアクターによってなされるのでしょうか？国政のレベルでなされる議論や決定のみならず、公共圏における討論、無数のアソシエーションの活動、世論そしてとくに若者の動向を見極めることは、日本に生きる私たちにもさまざまな示唆を与えてくれるものと思われまます。



18世紀に作成されたカッシーニの地図

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b53095291n>



オクシタニー地域圏の首府トゥールーズのカピートル広場。トゥールーズは、アンシアン・レジーム期には、ラングドック地方の司法行政の中心地として知られる。

[https://fr.wikipedia.org/wiki/Place_du_Capitole_\(Toulouse\)#/media/Fic](https://fr.wikipedia.org/wiki/Place_du_Capitole_(Toulouse)#/media/Fic)



オー＝ド＝フランス地域圏の首府リールのグラン・プラス。

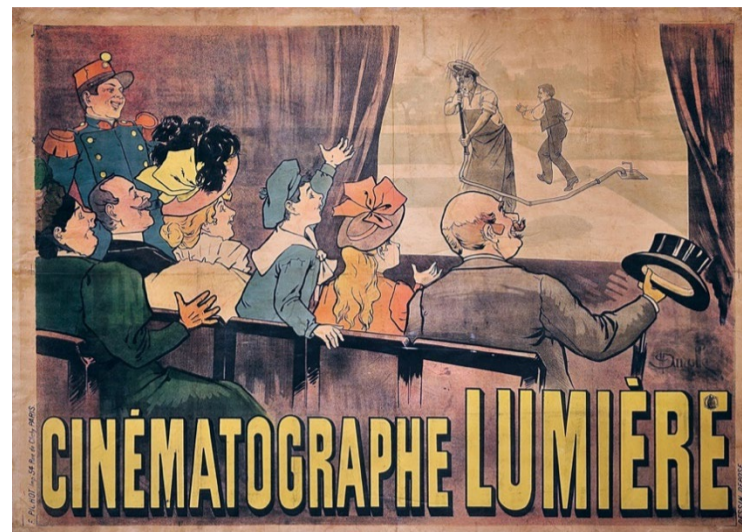
https://en.wikipedia.org/wiki/File:Grand_place,_Lille.jpg

II. 人と文化

フランスが「中堅国家 puissance moyenne（ミドル・パワー）」であるという理解は、1974年から1981年まで大統領を務めたジスカール・デスタン自身の発言に由来しますが、今日メディア空間に流通するいわばフランスの自己認識を構成しています。このような言表には、しばしば「しかしながら～」という留保がつき、フランスが言語そして文化によって世界的に影響をもつことが強調されます。フランス映画の独自の位置付けをみても、フランスが、重要なソフト・パワーであるということは否定できません。



シャガールによるパリ、オペラ座の天井画



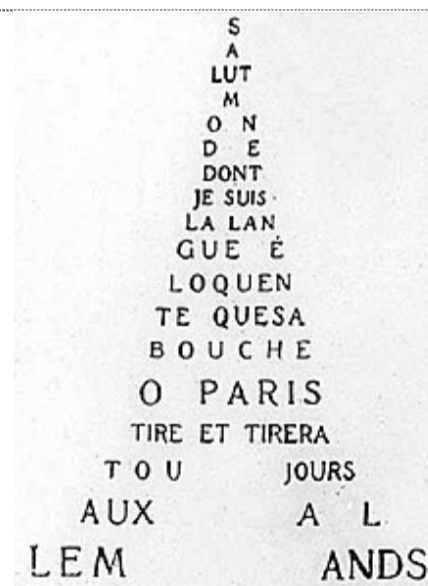
映画の発明者リュミエール兄弟によって制作された『水をかけられた散水夫 L'Arroseur Arrosé』（1895年）のポスター
By Marcellin Auzolle (1862-1942)

http://www.moah.org/exhibits/archives/movies/movie_theatres_p.html, CC BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=11110457>



左：2022年ノーベル文学賞を受賞したアニー・エルノー

右：エルノーの著作『事件』（2000）を原作とする映画『あのこと』（2021）

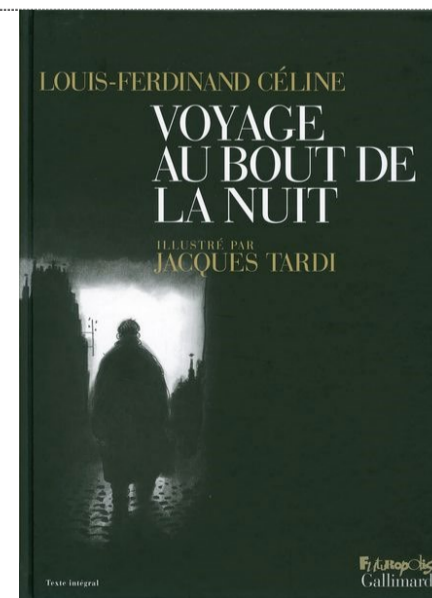


左：「ミラボー橋」で知られる詩人アポリネールは、第一次世界大戦で負傷し、終戦間近にスペイン風邪で帰らぬ人となった。

右：アポリネールによるカリグラム



カンヌ映画祭のポスター



「第九芸術」と呼ばれるバンド・デシネ（bande dessinée）

左：アングレーム国際漫画祭で最優秀賞を受賞したリアド・サトゥフの『未来のアラブ人』は、日本語にも翻訳され高い評価を受けている。

右：セリーヌの『夜の果ての旅』はジャック・タルディによってバンド・デシネ化された。

建築



建築家ジャン・ヌーヴェルによる「アラブ世界研究所」

par Arthur Weidmann — Travail personnel, CC BY-SA 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=125341205>



建築家ドミニク・ペローによる「フランス国立図書館」

Par Arthur Weidmann — Travail personnel, CC BY-SA 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=118249980>

III. フランスの大いなる「遺産」—自然から歴史的建造物まで

フランスには、豊かな自然が残されています。地中海や大西洋沿岸、ピレネー、アルプス、ヴォージュといった広大な山脈、セーヌ川、ロワール川、ローヌ川、ガロンヌ川をはじめとする河川は、多様で美しい景観を作り出すのみならず、生物多様性の宝庫となっています。今日、地球環境の危機が深刻化するなかで、これらの自然環境を保存し次世代に伝えなければならないという意識がますます高まっています。

現代フランス語で、「遺産」を意味する«patrimoine»はさまざまなコンテキストのなかで頻出する単語です。親から子供に受け渡される財産という意味、生物個体が生れもつ遺伝形質という意味のほか、文化、思想、建造物、芸術、自然、景観といった多様な対象物が、世代から世代へ伝えられなければならない「遺産」として表現されます。革命時には、圧政のシンボルとして建造物が破損されることがありましたが、そのなかで、それらを公共の財として保存すべきだという考えが生まれまた表明されるようになったとされます。しかし、そうした活動が本格的にすすめられるのは、七月王政に入ってからのことでした。作家でもあったプロスペル・メリメが歴史的建造物の監察官として活躍したことが知られています。以来、さまざまな種類の「遺産」を保護するための法律やイニシアティヴが積み重ねられてきました。フランスに数多くのユネスコの世界遺産があるのも、そのような実践の結果として理解されます。



世界遺産「ピレネー山脈-ペルデュ山」

https://fr.wikipedia.org/wiki/Pyr%C3%A9n%C3%A9es-Mont_Perdu#/media/Fichier:Cirque_de_Soaso_et_massif_du_Mont-Perdu.jpg

世界遺産「天日製塩施設、サラン-レーバン大製塩所からアルケ-スナン王立製塩所まで」

https://fr.wikipedia.org/wiki/Saline_royale_d%27Arc-et-Senans#/media/Fichier:Saline_royale_d'Arc-et-Senans_nord.jpg



世界遺産「ミディ運河」

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/4/45/Xvolks_canal_du_midi_01.jpg

IV. 現代フランスを形成する過去、またその記憶

現代フランスの諸側面は、どのように歴史的に生成されてきたのでしょうか？歴史をひもとく、過去に起こった出来事に目を向け、それを踏まえることは、人間がよりよく生きるために必要不可欠な作業です。

20 世紀は、激動の時代でした。第一次世界大戦、第二次世界大戦—ドイツの侵攻を受けて降伏したフランスではヴィシー政権が成立し、フランス当局によってユダヤ人の迫害が行われました—、戦後の復興、独仏和解、ヨーロッパの統合、アルジェリア戦争、五月革命といった一連の出来事や動向の影響は、いうまでもなく、同時代のフランス社会に限定されません。

19 世紀には、フランス革命からナポレオン時代を通じて、法の下での平等と私的所有権の不可侵という原則が、フランス社会に定着していきます。帝政、王政、共和政といった異なった政体が展開し、七月革命、二月革命によって民衆が再び歴史の前景に登場します。果たして、彼（女）らは、その行動と希求にみあう政治的また社会的な権利を獲得したのでしょうか？普仏戦争の敗北とパリ・コングレムの弾圧で始まる第三共和政は、初等教育の無償化、労働組合の合法化、政教分離法や結社法の制定によって「共和主義的な価値観」を実現させた時代としてしばしば想起されます。同時に、国外では、広大なフランス植民地帝国が完成されていく時代であったことを忘れてはなりません。

近代の幕開けをおこなったフランス革命に先行する約三世紀（16、17、18 世紀）にあたる時代は、「初期近代」「近世」「アンシアン・レジーム」といった呼称で呼ばれています。人間性の再生をめざした「人文主義」またそれに触発された「宗教改革」。フランスを引き裂いた「宗教戦争」またその混乱を收拾したブルボン朝の国王のもとで形成される「絶対王政」。プロテスタントに信仰の自由を認めた「ナント王令」とその廃止、プロテスタントの受難と海外逃亡。宗教的寛容や人権思想の形成を促した「啓蒙」。数々の戦争—ルイ 14 世が親政期におこなった一連の侵略戦争から史上初の世界大戦とも呼ばれる七年戦争など—、またそれが引き起こす増税や財政危機。年表を手がかりに、出来事やキーワードをいくつかひろってみるだけでも、近世における歴史的経験がいかに重要なものだったかが具体的に窺えます。

今日、人々の時間との関係は変容したとされます。とくにインターネットの普及によって、人々は瞬時瞬時の関心事に心を奪われ「絶え間のない現在」の虜になってしまう傾向があるとされます。そのような観点からも、歴史への感性を研ぎ澄ませること、歴史的な真実を踏まえることは人間がよりよく生きるために必要な作業であるといえるでしょう。

「フランス」の歴史的な成り立ち

- ☆現代のフランス
- ☆戦後のフランス
- ☆ヴィシー政権
- ☆第三共和政
- ☆王政復古、七月王政、第二共和政、第二帝政
- ☆フランス革命とナポレオン
- ☆アンシアン・レジーム
 - 啓蒙の時代
 - 絶対王政の展開
 - 宗教戦争
 - 人文主義と宗教改革

22 septembre 1984 - Infographie

Une poignée de main historique pour sceller l'amitié franco-allemande



1984 年 9 月 22 日、ヴェルダンで二度の世界大戦における独仏両国の戦没者に対して哀悼の意を表すミッテラン大統領とコール首相。

<https://www.gouvernement.fr/partage/8719-une-poignee-de-main-historique-pour-sceller-l-amitie-franco-allemande>

論争される過去、またその記憶



『民衆を導く自由の女神』（1830）

七月革命でのパリの市街戦をテーマとするドラクロワの絵画『民衆を導く自由の女神』（1830）には、三色旗を掲げ、フリジア帽をかぶった女性が描かれています。フリジア帽は、フランス革命を推進したサン・キュロットがかぶっていた赤い帽子です。古代ローマで解放された奴隷が着用したとされるかぶりものにちなんで、隷属からの解放と自由への希求の意味が込められています。このような女性の姿は、主に第三共和政下に共和国のシンボルとなるマリアンヌの姿を彷彿とさせます。

https://fr.wikipedia.org/wiki/La_Libert%C3%A9_guidant_le_peuple#/media/Fichier:Eug%C3%A8ne_Delacroix_Le_28_Juillet_Le_Libert%C3%A9_guidant_le_peuple.jpg

ヴェルサイユ行進

1789年10月5日、パンの価格の高騰に苦しむパリの女性たちは、みずからの窮状を訴えるべくパリからヴェルサイユへ向かい、議会や宮殿に入りこみ意思表示を行います。彼女たちの圧力の前に、国王は、食糧の供給を約束し、また、『人間と市民の権利の宣言（人権宣言）』を裁可するなどの譲歩を余儀なくされます。

« Source gallica.bnf.fr / BnF »



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France



『女性の権利宣言』を記したオランプ・ド・グージュ

フランス革命における女性の数々の貢献にもかかわらず、革命家たちが、女性の権利の承認には否定的だったことが指摘されてきました。『人間と市民の権利の宣言（人権宣言）』が想定する「人間と市民」は、えてして女性というカテゴリーを排除したものでした。そのような状況に抗して、オランプ・ド・グージュは、『女性の権利宣言』を記し、男女平等を唱え、女性の権利の擁護を行いました。近年、歴史家また市民の間で、オランプ・ド・グージュのパンテオン入りを望む声が上がっています。男性中心の歴史叙述や記憶あり方には、今日疑問が呈されているといえます。